

第7回絆プロジェクト！蘇らせよう！小名浜 [ふくしまオーガニックコットンプロジェクト](#)



未来へつなげる絆 福島県いわき市小名浜地区の綿農家農業支援ボランティア

東日本大震災の被災地・被災者の支援にあたっては、長期的な支援活動が不可欠であり、今後も引き続き被災された方々のニーズや状況に応じた活動を継続的にしていく必要があります。一方で、被災地から離れた地域では時間と共に徐々に関心が薄れつつあるのが現状です。被災地でのボランティア活動は終わりをあげたわけではありません。東日本大震災から4年6ヶ月が経過しましたが、被災地の状況について多くの人に現状を知ってもらう機会になればと、以下の内容で日帰りバスツアーを計画、実施しました。

日 時：平成27年10月 3日(土) 日帰り

行き先：いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター Tel/FAX 0246-92-4298
〒971-8168 福島県いわき市小名浜南君ヶ塚町 13-6

内 容：いわき市平藤間町の綿農家、綿の収穫を2時間程度
記録的な大雨で鬼怒川決壊の茨城県常総市、石下地区などを視察。

災害廃棄物は撤去され除染もすすんでいます。まだ人の手でやらなければならない作業が残っています。原発事故により、耕作放棄されてしまった遊休農地を利用して行われている有機栽培農法の綿の収穫をしてきました。いわき市の皆さまに元気を届け、絆を求めてコットン畑の収穫に精を出し、素敵な汗をかいてきました。被災地スタディツアーとして、記録的な大雨で鬼怒川が決壊した茨城県常総市、石下地区などを視察して被災地の現状を見て学んで来ました。今までに震災復興支援ボランティアバスツアーを7回実施し、240名を超える市民を被災地に動員しました。

いわきオーガニックコットンプロジェクトについて

東日本大震災の後、いわき市内では耕作放棄地が増えています。そこで、コットンをみんなで育てて、農家の皆さんと一緒にいわきでの新しい農業を進めようとしているのが、このプロジェクトです。

2013年には、市内外20箇所以上、3haの農地でコットンが育てられ、Tシャツなどを作ることになっています。農業や化学肥料を使わない安心な農業の形をみんなで作りたと思います。



※いわきで栽培している品種は日本在来の茶綿(和綿)です。

東日本大震災は複合的な災害を引き起こし、福島では、風評被害から生産者が農業を断念するケースも多く見られました。

また、農家の後継者不足などにより、遊休農地・耕作放棄地は年々増加し続けていました。

ふくしまオーガニックコットンプロジェクトは、2012 年春に始動し、食用ではなく、塩害にも強い綿を有機栽培で育て、収穫されるコットンを製品化・販売する一連の取り組みで、地域に活気と仕事を生み出すことを目的として活動され、支援の輪は全国に広がっています。

このプロジェクトに、なでしこ防災ネットも参加して昨年は秦野市東田原と寺山の荒廃地に茶綿を植え、収穫した茶綿を前回、福島県いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンターへ提供しました。

畑にてオーガニックコットンの栽培・製品化についての説明後、ボランティアセンタースタッフと一緒に茶綿の収穫のボランティアを2時間。触れ合いを通して、有機農業に対する想い、土に触れる喜びを感じてきました。

COTTON 収穫の様子



塩害にも強い茶綿の花



有機栽培の茶綿



茶綿の収穫の様子



ビニール袋に摘んだ綿を入れます



全員で収穫したのは450のビニール袋 3袋分



収穫した茶綿



現地ガイドの甘南備さんから説明



参加者27名とNPO法人ザ・ピープル現地スタッフ



現地ガイドの甘南備さんから現状を聞く

現在、福島は、復興に向け刻々と移り変わっている地域と、未だ当時のままの状態に取り残されている地域に分かれているようです。

被災地へ赴き、自身の身体を通して被災地を知り、感じたことを、どう考えて自身の暮らしに反映するのか。

震災が与えた教訓から学び、考え、活かしていく。一人では出来なくても、出会った人たち全員の変えていく『きっかけ』を見つけてもらう。そんな学びのボランティア体験でした。復興へ向けてささやかながら貢献できればと思います。

視察

被災地スタディツアーとして、記録的な大雨で鬼怒川が決壊した茨城県常総市、石下地区などを視察して被災地の現状を見て学んで来ました。

平成 27 年 9 月 6 日から 8 日にかけて、太平洋沿岸に停滞する前線の影響、9 日は台風第 18 号の影響、10 日は台風第 18 号から変わった低気圧に向かって湿った空気が流れ込んだ影響で、東海地方から関東甲信地方を中心に大雨となった。特に 10 日は茨城県と栃木県に激しい雨を降らせ、多数の河川で越水等による被害が発生した。この雨により、鬼怒川では、関東の直轄河川では昭和 61 年の小貝川以来となる堤防の決壊被害が発生し、これによる浸水範囲は、面積約 40 平方キロメートル、東西約 4 キロメートル、南北約 18 キロメートルに及んだ。

常総市と石下地区の視察をしてきました。地域交流センター「豊田城」など公共施設は避難所として使用されているため、水海道風土博物館館坂野家住宅【国指定重要文化財】を視察。受付スタッフが40分間、被災当日の様子や復旧の進捗状況を話して下さいました。

- ・仮設トイレが少ない。(地域交流センター8基・豊田文化センター2基・市民の広場及び市役所に、計30基を設置)
- ・浸水被害の大きかった同市沖新田地区は、あっという間に水が押し寄せてきたために逃げ遅れて2階に取り残され、ヘリコプターで救助された。
- ・広範囲に茶色に濁った水で覆われ、どこが道路なのか見分けがつかない状況が続いていた。ヘリによる救出活動とともに

浸水した市街地をボートで避難する人たちの姿が見られた。家が転がるようにひっくり返った。

- 水流が強く、家が破壊されたり、傾いたりしていたほか、水が引いた後の路面や田んぼには泥が堆積。 一帯の道路や田畑の大半は水没し、電柱や街路樹がなければどこが道か判別するのも難しい状況だった。
- 米の保管場所が浸水し、被害額が2億円を超えた。刈り取り後で出荷直前だった1000t以上のコメが浸水被害に遭った。
- 乗用車の多くはサイドミラー付近まで浸水。
- 自衛隊や警察のヘリが止めどなく往来。ヘリから降りた隊員がロープを伝って住民を救出してくれた。
- 報道された建物(流されなかった家)はハウスメーカーが来て1週間で修理をしていった。
- 消毒薬(ベンザルコニウム塩化物液(逆性石けん)および石灰の配布
- 一階が1メートル以上浸水したために家屋、家具、家財、食器類が泥まみれになった。洗浄や、廃棄物の整理をボランティアの方々がやって下さった。心からの感謝をしている。
- 被災家屋のがれき除去、壊れた家財の撤去、泥のかき出しや清掃、側溝整備(泥だし)、土砂の土嚢詰め等のボランティア
- 【ボランティア保険】は茨城県社会福祉協議会が負担。ボランティアに参加する人の負担はない。
- 盗難や犯罪など、防犯上問題が多々あったがボランティアの大勢の力はすごい。
- 支援を必要としている家庭はたくさんあり、一軒一軒の必要とする作業量は膨大なので継続的な支援が必要。



1990年(平成2年)撮影の水海道市街地周辺の空中写真



決壊地点周辺の状況



常総市石下下流左岸 氾濫状況



常総市災害ボランティアセンター



常総市災害ボランティアセンターの場所



ボランティアの流れ



壊れた家財の撤去、泥のかき出しや清掃、側溝整備(泥だし)



水海道風土博物館坂野家住宅【国指定重要文化財】を視察。受付スタッフが40分間、被災当日の様子や復旧の状況説明

